



彩の国
埼玉県

再発見シリーズ第2弾

中山道の脇往還 藤岡道の再発見

本庄市・金鑽神社～上里町・藤武橋



県の有形文化財に指定（平成 29 年 3 月 24 日）された金鑽神社社殿

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

発行に当たって

街道沿いを歩くと、普段あまり気に留めない風景の中、思わぬ発見に出会えます。

この小さな発見を楽しんでいただくため、このほど、「中山道最大の宿本庄宿の再発見」に続き、「藤岡道の再発見」を作成しました。

沿道の歴史、見どころ、グルメスポットのほか、隠れたエピソードや住んでいる人のインタビューなども掲載しています。

藤岡道を歩き、楽しむ際のガイドとして活用していただければ幸いです。

埼玉県北部地域振興センター 本庄事務所長 石川 勉



目 次

藤岡道とは	2
-------------	---

第1章 金鑽神社 ～ ドームの家.....	3
-----------------------	---

- 金鑽神社
- 佛母寺の銭洗弁財天 【本庄三弁天】
- 上里グルメ 【相川食堂】
- 停めづらい駐車場？ 【杉山寝具店】
- 住宅地間の古民家
- カリモク前の道祖神
- 19代続く武家の家 【金井家】
- 七本木神社
- 藤岡道沿いの貴重な水源 【新田川】
- 御典医を務めた医者の家 【大林家】
- ドームの家

第2章 三町 ～ 藤武橋.....	20
-------------------	----

- 三町
- 上里グルメ 【ぱさり村】
- 上里グルメ 【村島製菓】
- 宝蔵寺のマキの木
- 浅間神社
- 八十八夜会
- 別橋 【思案橋？】
- 吉祥院
- 吉祥院阿弥陀池の大蛇伝説
- 上里の田んぼを潤した楠川
- 諏訪神社
- 御陣場川起点
- 木曾義仲の父、帯刀先生源義賢ゆかりの福昌寺
- 五明水辺公園の双体道祖神
- 長浜の渡船場

藤岡道とは？

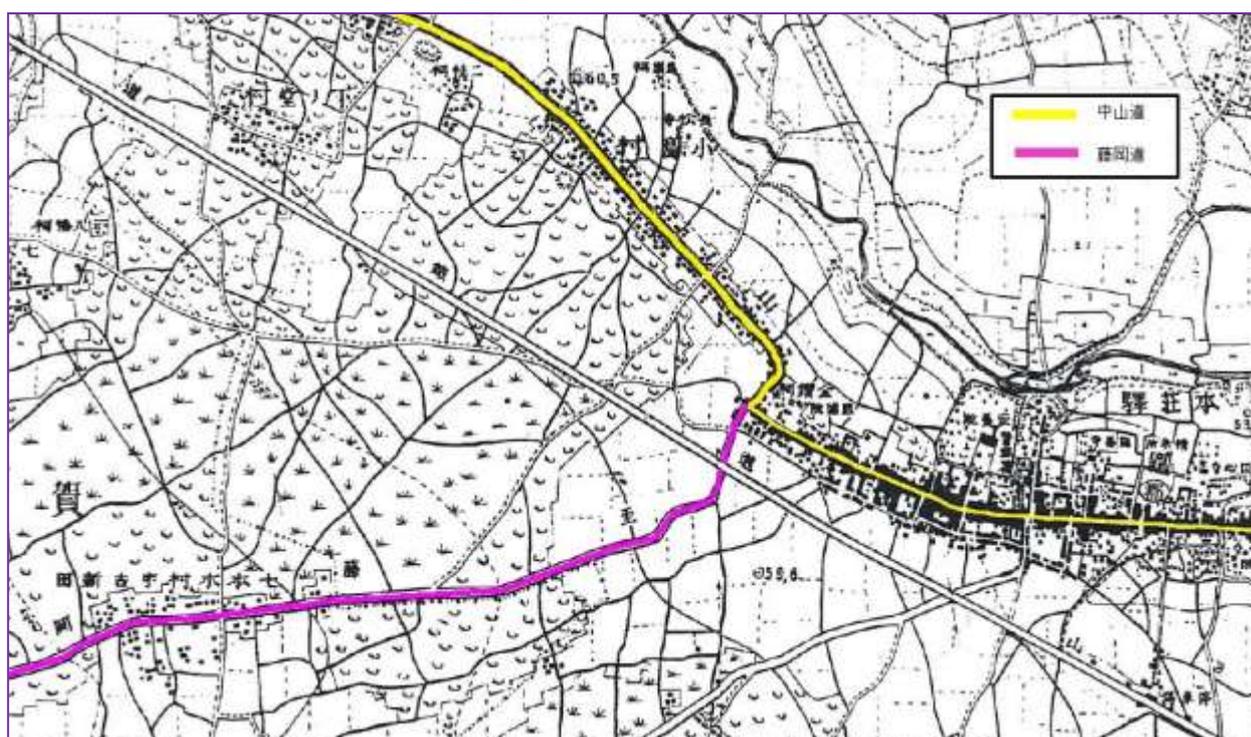
「藤岡道」は本庄宿で中山道から分岐し、藤岡、富岡、下仁田を經由して信州で再び中山道に合流する、中山道の脇往還であった。

中山道同様、江戸時代初期に成立した街道で、地域によっては、小幡道、下仁田街道などと名を変えるが、幕府が作成した中山道分間延絵図では、本庄で分岐するこの道のことを「藤岡道」と記している。

碓氷峠や関所を通過することもなく、武家の往来も少なかったため、商業物資や善光寺参りの女性によく利用されたことから、「姫街道」とも呼ばれていた。

江戸時代には、七日市藩（富岡市）、小幡藩（甘楽町）、吉井藩（高崎市）などの大名が参勤交代で通った道といわれている。

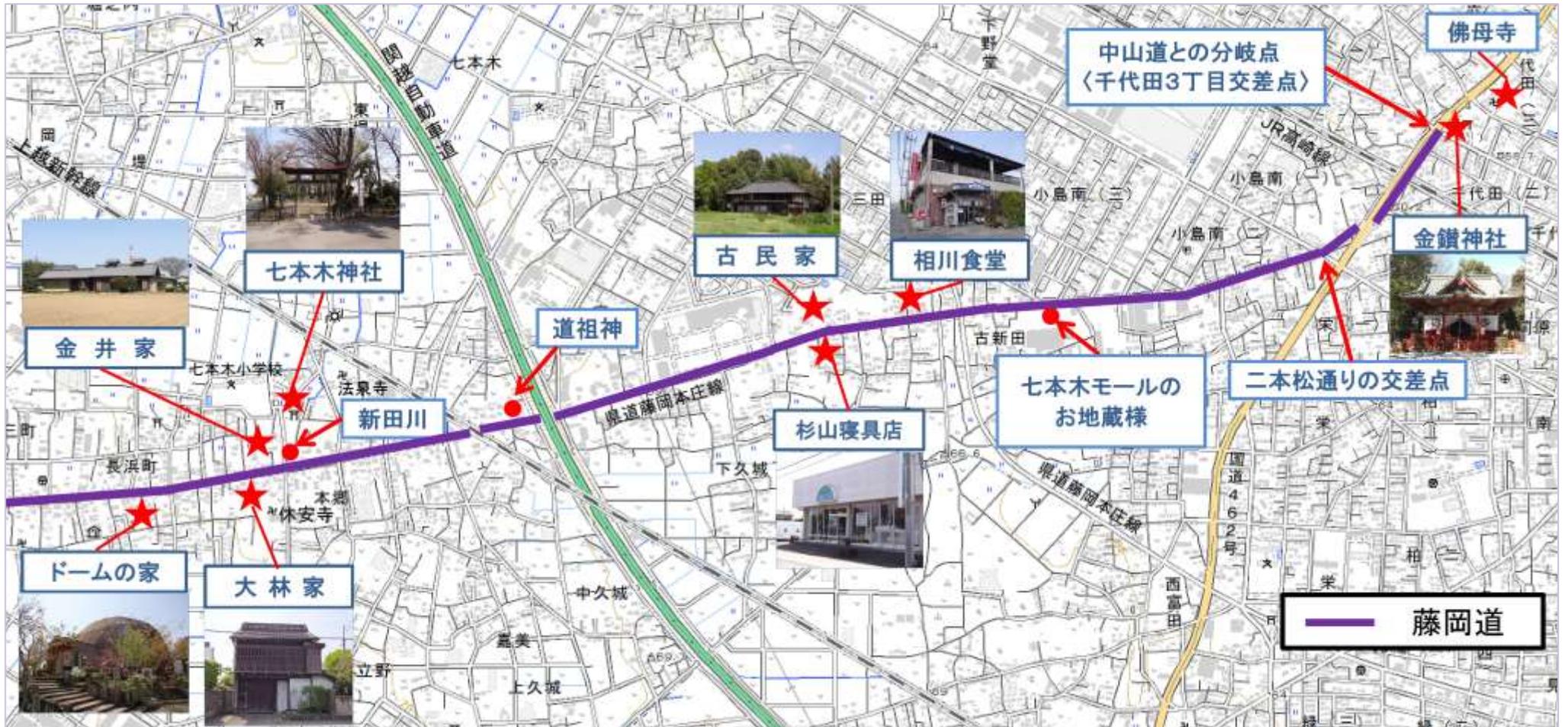
中山道との分岐点



明治 18 年の地図

第1章 金鑽神社～ドームの家

現在の地図



金鑽神社

社伝によると、創立は欽明天皇の2年（541）。武蔵七党のひとつである児玉党の氏神であり、本庄城主歴代の崇信も厚かった。本庄宿の総鎮守である。

境内は、欖や銀杏などの老樹に囲まれ、本殿と拝殿を幣殿で繋いだいわゆる権現造りの社殿のほか、大門、神楽殿、神輿庫などがある。



本殿は享保9年（1724）、拝殿は安永7年（1778）、幣殿は嘉永3年（1850）の再建で、それぞれ細部に見事な極彩色の彫刻が施されている。



幣殿には本庄宿の武正南慮や小倉紅於らが描いた天井絵も残されている。

この金鑽神社社殿は、平成29年3月24日、県の有形文化財（建造物）に指定された。



ご神木となっているクスノキの巨木は県指定の天然記念物で、幹回り5.1メートル、高さは約20メートル。

寛永16年（1639）本庄城主小笠原信嶺の孫にあたる忠貴が社殿建立の記念として献木したものと伝えられている。

絢爛豪華な山車が中山道を巡行する秋季大祭（本庄まつり）をはじめとして年中行事も多い。

年中行事の一つ「神迎祭」は、神無月（10月）に出雲大社に行っていた神様が帰ってくる11月1日（旧暦）午前零時に神様をお迎えする特殊神事。

中山真樹 宮司によると、「神社ではお参りに来た人に熊手を授けているが、町中の商店も協賛してそれぞれの店の商品を配布するので、以前は午前4時頃まで賑わっていた」そうだ。

今は午前1時頃には一段落するそうだが、最近あまり見なくなった真夜中の行事である。

参拝帰りに、和菓子屋で「大福」を買って帰ると福を招くといわれている。

佛母寺の銭洗弁財天【本庄三弁天】

金鑽神社のすぐ北にある佛母寺には、銭洗弁財天がある。ちょっと漫画チックな微笑ましい顔立ちで癒される。

立札には「この浄水にて硬貨、紙幣を洗い清め、資本金としてお持ち帰り、ご家業にご精進ください」と書いてある。試しに一万円札を洗ってみたが、効果はいかに・・・。



本庄には銭洗弁財天が3体ある。

大正院には黄金色に輝く弁天様があり、弁天堂の中に鎮座している。

慈恩寺の弁天様は優美な姿で、龍の口から流れる水でお金を洗うと財宝に恵まれるそうだ。

一つの市内に3体の銭洗弁財天があるというのは珍しい。



なお、本庄市内にはこの3体の弁財天を含む10の社寺に「武州本庄七福神」が点在しており、七福神めぐりをテーマに街を散策してみるのもいいだろう。

中山道との分岐点【千代田3丁目交差点】

さて、金鑽神社の西「千代田3丁目」交差点が中山道と藤岡道との分岐点である。

この交差点で、国道462号を北へ向かうと中山道、南へ向かうと藤岡道である。

現在ここには「中山道本庄宿」の石柱と石灯籠があり、かつての名残をとどめている。



国道462号はすぐに高崎線を越える跨線橋となる。

脇の階段を上って高崎線を越え、跨線橋の下を横切る道路に沿って進むと右手にさいたまセシモニーが見えてくる



ここが二本松通りとの交差点だ。

この交差点を直進し、800メートルほど進むと、七本木モールの広い駐車場が見えてくる。



この駐車場と歩道の上に緩衝帯の芝生があるが、その一角に小さなお地蔵様が祭られている。

注意しないと見過ごしてしまいそうだが、花も水も供えられ、掃除も行き届いている。誰かがきちんと管理しているらしい。



上里グルメ【相川食堂】

七本木モールのお地蔵様から 300 メートルほど進むと、広い駐車場に昭和を感じさせるたたずまいの食堂がある。

相川食堂だ。

昭和39年創業で、藤岡道が砂利道だった頃から50年以上この地で地元の人に親しまれている。



中華や定食などメニューは豊富で、手間暇かけたボリューム満点の料理が楽しめる。

「お客さんに自由に冷蔵庫を開けてとってもらっている」(店主の相川充さん)というサラダの食べ放題なども常連さんにはおなじみだ。

ところで、この店の隠れた名物のご当地グルメの『つみっこ』。
毎年1月に本庄市で開かれる「つみっこ合戦」で10回のうち5回優勝という実績を誇る。(上里町商工会として出場)
地元産野菜に牛肉入り、柚子の香りが上品だ。
牛肉から出る出汁と醤油味の組み合わせが一瞬すき焼きをほうふつさせる。
牛肉はかまなくても崩れるほど柔らかく煮込んである。
慣れ親しんだ『つみっこ』とは一味違う驚きを楽しめる一品だ。

充さんは「『つみっこ』は冬の食べ物のイメージだが、うちは一年中出している。牛肉は4時間ほど煮込んでおり、出汁にも工夫をしている」と話していた。



地元野菜がたっぷりで『つみっこ』が見えないほど

停めづらい駐車場？【杉山寝具店】

相川食堂を出て300メートルほど進むと、道路の左側、杉山寝具店の駐車スペースに何やら祠のようなものがある。

隅に寄せてあるわけではなく、車が停めにくそうだ。

店主の杉山実さんにお話を伺った。



「これはうちの氏神様。店舗の建て替えで今は駐車場となっているが、昔からこの場所にあった。氏神様は家に向かって斜めに置くものだから、（駐車場の使い勝手が多少悪くても）そのままにしてある」そうだ。

ここで商売を始めて50年になるそうだが、「若い頃はこの道は砂利道で、道端には水路があった。本庄の街に自転車で出かけると帰りにはポマードで固めた頭が砂埃で真っ白になったものだ」と話してくれた。

住宅地の中の古民家



杉山寝具店の斜め向かい、大きな空地の向こうに旧家が見える。この辺りは杉山姓の家が多いが、その本家筋に当たる家だという。

医院を営んでいたらしいが、静岡の方に移転して、現在は空き家になっている。2階建ての立派な古民家である。裏にはうっそうとした竹林も見える。

カリモク前の道祖神

先を急ごう。800メートルほど進み、関越自動車道の下をくぐると右にカリモク家具のショールームがある。

この入り口近くのレンガブロックで囲った一角に、道祖神などの石碑が集められている。



道祖神というと長野県安曇野などにある男女が対になったものが思い浮かぶが、ここのものは文字で「道祖神」と書いてある。

この先、上里町の五明地区(33ページ)には銚子と盃を持った男女2神の双体道祖神がある。

19代続く武家の家 【金井家】

上越新幹線の高架をくぐり、3つ目の信号（手押し）の角から北側を見ると、畑の向こうに高窓の家がある。高窓の家と西側にある門は一体になっているように見えるが、何やら由緒ありげな・・・。



所有者の金井孝さんにお話を伺った。

高窓の家は、昭和2年に建て替えたもので養蚕をやっていたころの名残。

今は、高窓の扉は塞いであり、形だけ残して物置として使っているという。

一体に見えた西側の門と高窓の家は別棟になっていた。

門の柱には打ちこわし（武州世直し一揆か）にあったときつけられたという刀傷が残っている。歴史の刻まれた門である。



門を入ると母屋があるが、とにかく敷地が広い。門前の畑のほか、母屋の裏にも畑が広がっている。

金井家の東側には道路を挟んで七本木神社があるが、ここも元は金井家の屋敷内で、鬼門除けとして祭られた氏神様（八幡神社）だったそうだ。

以前は、七本木小学校や隣の公園をはじめ、北は新幹線の高架があるあたりまで、金井家の所有地が広がっていたという。

実は金井さんの祖先は、新田一族の金井筑前守政綱。

戦国時代に金窪城主斉藤摂津守定盛の娘と結婚して七本木に移り住み、この辺りを開発した。孝さんは19代目の当主に当たる。

七本木神社のほか、近くにある法泉寺、休安寺、西福寺も、天正～寛永年間（1573年～1644年）に金井筑前守が建てた寺と伝えられている。



なお、金井家には、先祖伝来の品として㊦の家紋の付いた陣笠が残されている。

この金井家の紋は、村上義清の代に武田信玄との合戦に二度勝利し、川中島合戦のきっかけをつくった信州村上氏と同じものである。



個人のお宅なので内部の公開はしていません。

七本木神社



金井筑前守が建てた八幡神社は、明治42年に近隣の榛名・愛宕・白岩・稲荷二社・八幡二社と、更にその境内社11社を合祀して、村全体を守る七本木神社となった。

合祀した7社の旧本殿は、七本木神社本殿の右にある建物に納められている。

合祀された境内社の一つ「八坂神社」は、本殿の右横に石碑があり、夏の八坂神社の大祭では、ここに櫓を組んで獅子舞が奉納される。

本郷獅子舞保存会によるこの獅子舞は「悪魔祓い」「ヤクザサラ」などと言われ、激しい舞が特徴だ。

また、鳥居を入ってすぐ右手には、愛宕塚から移転した庚申塚がある。

98基の庚申塔が建てられており、最も古い庚申塔は享保16年（1731年）の青面金剛像である。



藤岡道沿いの貴重な水源【新田川（しんでんがわ）】



藤岡道から七本木神社（手前）方向に流れてくる新田川

藤岡道沿線の人に話を聞くと、この道に沿って水路があったという話をよく聞かすが、これは新田川のことです。現在の三町交差点から本庄市街に向けて道沿いに、幅8尺～9尺の水路があった。

新田川は、江戸時代初めに当時の七本木村と堤村が伊奈備前守忠次に願い出て、開削された用水路で、この地域の貴重な水源だった。

神流川の安楽堰（現神川町小浜）から引水し、一部は防火用水として本庄宿まで流下していた。

現在は、道路側溝として暗渠化されているが、分水した水路の一部を七本木神社参道脇に見ることができる。

御典医を務めた医者の家 【大林家】

金井家の道路を挟んだ向かい側には大林医院の看板と、隣には上に蔵が乗っているような？変わった門がある。



大林医院の大林晴美さんにお話を伺ってみた。大林家は代々医者の家系で晴美さんで13代目とのこと。江戸時代には松平家の御典医を務め、主家の国替えに絡んでこの地に住みついたという。

三つ葉葵の紋と「参州（三河国）松平」と書かれた木札が残っている。

大林医院の隣にある門は薬医門で、大きな扉の左隅には小さな扉が付いていて普段はこちらから出入りしていたようだ。



珍しいのは、この門の上に蔵が乗っているところである。

案内をしてくれた大林洋子さんによると、「大林家は地主でもあったため、門の2階には門番が住んでいて、小作人から集めた米の監視をしていた」という。



門の奥には、蔵と立派な母屋がある。

道路から見える母屋は2階建てだが、屋根裏まで含めると3階ほどの高さがある。

天井まで1本の櫓の柱が通っていて、以前は門と一体でL字型に繋がっていたそうだ。

豪雪地帯である新潟の小千谷にあったものを移設したものだという。

今は埋められたが、以前、大林家の敷地内には川が流れており、2階から魚釣りができたという。



個人のお宅なので内部の公開はしていません。

ドームの家

藤岡道を更に350mほど西に行った辺りで、道路の左側に気をつけて進むと、少し奥まったところにドームのような建物が見える。円形でところどころに穴が開いていて、宇宙基地のような・・・。

近づいてみると、ちゃんと入口もあって、穴のように見えたのは窓だった。この家に住む須永賢太郎さん、直子さん夫妻に話を聞いてみた。



「学生時代からログハウスが建てたかった」。そんな賢太郎さんが夢の実現に着手したのは13年前。

展示場を見に行った際に、「外枠のパネルは一人で持ち運びできる」とのふれこみを聞いて、このドーム型ログハウスのパネルを購入したそうだ。

その後、パネルの組み立てはもちろん、整地、基礎工事、上下水道工事など電気工事を除いた全ての工事を一人で行い、3年かけて完成させたという。まさに手作りのログハウスである。



ドームは三角のパネルの組み合わせで、ところどころに窓が付いている。この窓は太陽の通り道（上る角度）に沿って配置されており、ガラスを体に括りつけてよじ登り、設置したそうだ。

南側にはウッドデッキがあり、取り囲むように白樺や紅葉が植えられている。

外枠は既製品だが、ドームの中はすべて賢太郎さんの設計。直径12m、天井までの高さは8mあり、柱のない開放的な空間が広がる。半分は吹き抜け、半分はロフト（2階）である。

内装は天然の木がふんだんに使われていて、無垢の木を張った床は冷たさを感じない。直子さんによると、木が季節によって伸び縮みし、呼吸しているのがわかるそうだ。

2階に上がる階段は、公共施設の基準を用い、段差を低く、幅を広くしている。さらに、キッチンやドレッサーは、直子さんの身長に合わせて設計したそうだ。



気になる冷暖房だが、断熱材は寒冷地仕様のを敷設。

世界最大の薪ストーブを使用していることから、夜、薪を2本入れておくと、真冬でも明け方で25度あるそうだ。

また夏は2台ある業務用クーラーが活躍し、一回冷えてしまえば弱運転で間に合うらしい。南側の窓の外に大きく育った木々も涼しい木陰を作ってくれるそうだ。

不思議なドームの家は、実は快適なログハウスだった。

個人のお宅なので内部の公開はしていません。

第2章 三町～藤武橋

現在の地図



三町（みまち）

ドームの家を過ぎて、300メートルほど行くと、右側に上里三町郵便局がある。この先の交差点にも三町の表示が・・・。

町といわれてもこの辺りは商店街もなく、いわゆる町のイメージではないが…？



この三町の地名は、江戸時代、藤岡道沿いにつくられた安楽町、長浜町、横町の三つの町場が、明治9年に合併して三町村（みまちむら）になったことに由来する。

三つの町は、江戸時代初めに藤岡道を通行する人が増えたため、荷物を運ぶ人馬の継立や立場がつくられて町場となったもので、安楽町は安楽村から、長浜町は長浜村から移住した人が住んだ。横町は街道の横にあることから大御堂村から分村して横町と名付けられたという。

ちなみに、七本木も江戸時代初期には七本木町と呼ばれ、安楽町、長浜町と連担して宿場を形成していた。

上里グルメ【ぱさり村】

上里三町郵便局看板を右に折れ、200メートルほど行くと、左手にシラカバの木とラベンダー畑が見えてくる。高原のような風景だ。



駐車場の看板に、「ぱさり村」と書いてある。

ラベンダー畑の中にある4棟のレンガ調の建物の赤が緑に映える。そのうちの 하나가カフェ「ぱさり村の食卓 とうる〜る〜」になっている。



ぱさり村 村長の井上彩さんにお話を伺った。

この農園とカフェは彩さんの母、泉さんが立ち上げ、4年前に彩さんが引き継いだ。

泉さんが農園を立ち上げた頃、彩さんは高校生。その頃から裏方で手伝っていたそうだ。



「自然の食材を使う」という母のこだわりはそのままに、彩さんのアイデアを取り入れ、母娘2代で現在の形にたどり着いた。



お粥のお膳とオムライス



彩さんの一押しは、「滋味あふれるお粥」だそうだ。

体にやさしい「お粥」は数種類あり、メニューにはそれぞれの効能が書かれているので、その日の体調に合わせて選べる。

泉さんのときからの定番メニュー「オムライス」は、雑穀米の上にふわふわのオムレツが乗っていて、トマトソースがかかっている。トマトソースの酸味がオムレツのまろやかさにぴったりだ。



ラベンダー畑は綺麗に手入れされている。アヒルがつかいで放し飼いにされていて何ともどかだ。

6月中旬から7月上旬はラベンダーの香りに包まれる。

「ここに来て、自分の庭だと思い楽しんでもらえれば」と彩さんは話していた。



ラベンダーの間にアヒルのお尻が見えかくれ

上里グルメ【村島製菓】

三町郵便局看板まで戻り、藤岡道を西へ 200mほど進むと、右手に洋風のおしゃれなお店が見えてくる。上里町で洋菓子の草分け的存在の村島製菓だ。



村島製菓はもともと和菓子屋だったが、3代目に当たる村島正明さんが一念発起し、東京の学校で洋菓子を学んで、昭和50年代からは洋菓子も作るようになった。

この辺りには当時洋菓子店はなく、「洋菓子を東京で学ぶ」という正明さんの思いを聞いた母親はとても驚いていたそうだ。

ショーケースには様々なケーキが並び、お客さんが次々にやってくる。

奥さんの久美子さんによると「地産地消の店として、できるだけ地元のものを使うようにしている。」とのこと。

『こむぎっちサブレ』は上里産の小麦を、『おいしいぷりん』も上里の松本養鶏場の卵を使用しているという。

ケーキに使うイチゴも6月の始めまでは地元上里産だそうだ。

店の右奥には和菓子のコーナーが。和菓子は、4代目に当たる息子の慎太郎さんが引き継いでいる。

和菓子は季節ごとに需要があるそう。お団子やどら焼き、大光寺にある「見透燈籠」をデザインした最中なども人気があるという。



村島製菓を出て西に150メートルほど進むと「三町」交差点に差し掛かるが、ここで少し寄り道を・・・。

交差点を左折して南に進路をとる。

宝蔵寺のマキの木



900メートルほど進むと左手に神社の鳥居が見えてくるが、少し先、道路の右手に宝蔵寺がある。

この寺にある「マキの木」は、今でも幹回り5メートル、高さ15メートルの大木だが、昔はもっと大きかった。

そのため、戦争中、児玉飛行場の飛行機の発着に支障をきたすということで、上部を切って短くしたという経緯がある。

木の下には、榎木大明神の碑が建てられている。

浅間神社

宝蔵寺の隣の浅間神社には大きな塚がある。もとは古墳であったが、江戸時代に富士山を信仰する富士浅間講の富士塚として現在の形に改められた。

頂上には雷電神社が鎮座しているが、ここが上里町でもっとも標高が高い地点である。



八十八夜会

この浅間神社では、毎年5月3日、八十八夜祭と呼ばれる芸能大会が開かれる。

これは芸能人を招いて開く演歌ショーのようなものではなく、地域の人々が役者に扮する素人芸能の大会だ。

近所のお年寄りから子供たちまでがこの日のために衣装を用意し、化粧して、かつらをかぶって熱演する。



八十八夜会会長の青木猛さんに話を伺うと「戦時中に途絶えていたものを復活させた。今どき、このような祭りは、県内では珍しいのではないか」と話していた。

この祭り以外にも八十八夜ちんどん隊の名で介護施設の慰問を年5～6回やっているという。

別橋 【思案橋？】

来た道を「三町」交差点まで戻り、西へ100メートルほど行くと小さな橋がある。車では気づかずに通り過ぎてしまうような橋だが、欄干には別橋（わかればし）の文字が。



近くに住む関根孝道さんの話では「昔の小学生は歩きで遠足に行ったが、ここが帰りの解散場所だったので別橋と呼ばれるようになった。この川も今は小さな水路だが、昔は水量も多く面白いように魚が釣れたものだ」という。

なお、この橋にはもう一つの言い伝えが。「昔、このあたりの若者が今夜はどこに遊びに行こうか？本庄にするか？藤岡にするか？それとも新町にするか？いろいろ思案したことから通称思案橋と言われるようになった」という。

こちらはかなり俗めいた話だが、いずれにしてもこの辺りが交通の要衝だったことを示すエピソードである。



吉祥院



別橋から西に70メートルほど進むと「三町西」交差点に差し掛かる。
ここで再び左折し、南に進路をとる。

700メートルほどで、「吉祥院→200m」の道路標識が見えるが、標識に従って右折すると吉祥院に入る。

吉祥院は、大同元年（806）に創建され、治承4年（1180）に武蔵七党の丹党に属した有力武将安保実光が再興したといわれている。

安保氏の氏寺で、中世の館跡といわれており、周りには堀があって、土塁の一部も残っている。

この地域の旧村名は大御堂村だが、これは、吉祥院の阿弥陀堂が大伽藍だったために、大御堂と呼ばれたことに由来する。

その阿弥陀堂は、もとは寺の西方にあり、発掘調査によって、堂の正面に大きな池と中の島を持つ浄土式庭園があったことが発見された。



吉祥院の西側にある木立が浄土式庭園跡

吉祥院阿弥陀池の大蛇伝説

なお、この阿弥陀池には大蛇伝説が残されている・・・。

あるとき、阿弥陀池に大蛇が出るという噂が広まった。杉の木の上に白い大きな体を絡ませているのを見たという人や池の水面を鎌首を上げて泳いでいるところを見たという人もいて、池の魚も少なくなってきた。

吉祥院の和尚さんが大蛇退治の祈禱を行ったものの効果がなく、次第にお参りに来る人も減って、賑わっていたお寺も寂れてしまった。

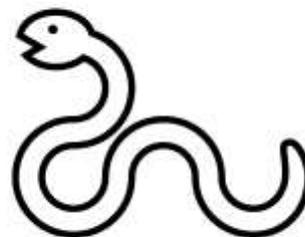
そのとき、この話を聞いた長浜の住人で羽黒山で修業を積んだ清水清左衛門という人が大蛇退治を申し出た。

清左衛門は、仁王門の屋根から獲物を狙っていた大蛇を見つけると、念仏を唱え、先祖伝来の刀を力いっぱい振りおろした。見事大蛇の首が飛んで、阿弥陀池に沈み、その後、阿弥陀堂は元のにぎわいを取り戻したという。

大蛇伝説は「ヤマタノオロチ」のように、一般には河川の氾濫などを治めたことのとえとして、治水の歴史を伝えるケースが多い。

大蛇堀という名の用水路が吉祥院の阿弥陀池に注いでいたことから、この伝説が生まれたものと考えられるが、大蛇を退治したことでお寺に賑わいが戻るといった伝説はちょっと珍しい。

ちなみに、この清左衛門の子孫だという人が今も長浜地区に住んでいるそうだ。



上里の田んぼを潤した楠川（くすかわ）

「三町西」交差点まで戻って再び藤岡方面に向かう。

この辺りは集落の間に田畑が広がっているが、この地域の田んぼを潤す用水路として重要な役割を果たしてきたのが、楠川とこれを利用した安保領用水だ。

上里町には、塩川や小川と書いて「しょうかわ」と読む小字名がみられるが、これらはすべて楠川が流れる流域にあって、楠川に由来する地名と考えられている。

楠川は、神流川が乱流していたころの支流で、その痕跡は今でも曲流地形として残されている。古代はこうした曲流地形の脇にある自然堤防上に集落を営み、その下に耕作地を作って、開発を進めてきた。

藤木戸地区には楠川を分水するための堰が数多くみられる。

「三町西」交差点から800メートルほどで、長幡小学校入口に差し掛かるが、ここを右折して250メートルほど行くと、左に諏訪神社が見える。

諏訪神社



神橋から楠川上流を望む

この諏訪神社の辺りは、字^{せきやしき}関邸といい、もとは楠川の堰を守る屋敷があったといわれている。

今でも、神社の境内には水路があり、楠川（上流）と御陣場川（下流）の分岐点となっている。

御陣場川起点

道路を隔てて諏訪神社の反対側、藤木戸公会堂の脇に「一級河川御陣場川起点」の石碑が建っている。楠川は、御陣場川と名前を変え、ここから下流は県管理の一級河川となっている。



御陣場川起点から下流を望む



御陣場川とは、何やら武士や戦さに関連ありそうな名前だが、この河川の下流に御陣場という地名があり、そこから上流に向けて改修工事が行われたことから、その名をとって御陣場川と呼ばれるようになった。

ちなみにその御陣場は、滝川一益と北条氏直とが戦った神流川合戦の際に北条方が陣を敷いたところといわれている。

さて、ここで、源氏の武将源義賢ゆかりの福昌寺に寄り道をする。

来た道をさらに北に向かって750メートルほど進むと福昌寺入口の案内板がある。

右折して100メートルほど行くと福昌寺だ。

木曾義仲の父、 帯刀先生（たてわきせんじょう）源義賢ゆかりの福昌寺



源義賢は、鎌倉幕府を開いた源頼朝の叔父にあたる武将であるが、武蔵国大蔵館（現在の嵐山町）にいたところを頼朝の兄源義平に襲われ、上野国に逃げる途中この地で討ち取られたとされている。



源氏同士の争いで複雑だが、父に従っていた二男（義賢）を父と不仲だった長男（義朝）の息子（義平）が襲ったといえれば理解しやすいかもしれない。

この義賢の菩提を弔うために創建されたのが福昌寺で、本堂裏の多宝塔が義賢の墓とされている。

ちなみにこのとき逃げ延びた義賢の息子が、後に平氏を京の都から追い落とした木曾義仲である。

なお、この辺りの地名、帯刀（たてわき）は、義賢の官名にちなんだものとされている。

五明水辺公園の双体道祖神

福昌寺入口まで戻り、ここを右折し、北へ向かう。

100メートルほど先の交差点を左折して水路沿いの歩道を350メートルほど行くと、ベンチのある東屋がある。

五明水辺公園だ。



五明堰用水路の説明板の横に石仏群がある。

猿田彦大神など13基の石仏が置かれているが、11ページで紹介した双体道祖神はこの中の一つだ。

銚子を持った女神が、盃を持った男神に酒を注いでいる姿が微笑ましい。



道祖神は、村はずれの辻などに置かれ、村落内に悪疫や悪霊が入るのを防いでくれる塞の神（さえのかみ）として信仰された。また、旅人の無事を祈り、子孫繁栄、五穀豊穰、縁結びの神としても信仰されていた。

さて、来た道を藤岡道まで戻ることとする。

長幡小学校入口から西へ、藤岡方面に向かう。輸入住宅の展示場や蕎麦屋を右に見ながら進むと、やがて辺り一面に田園地帯が広がる景色となる。

右手に赤城山、左手に秩父の山々を見ながら進むと、1.3キロメートルほどで神流川の堤防にさしかかる。

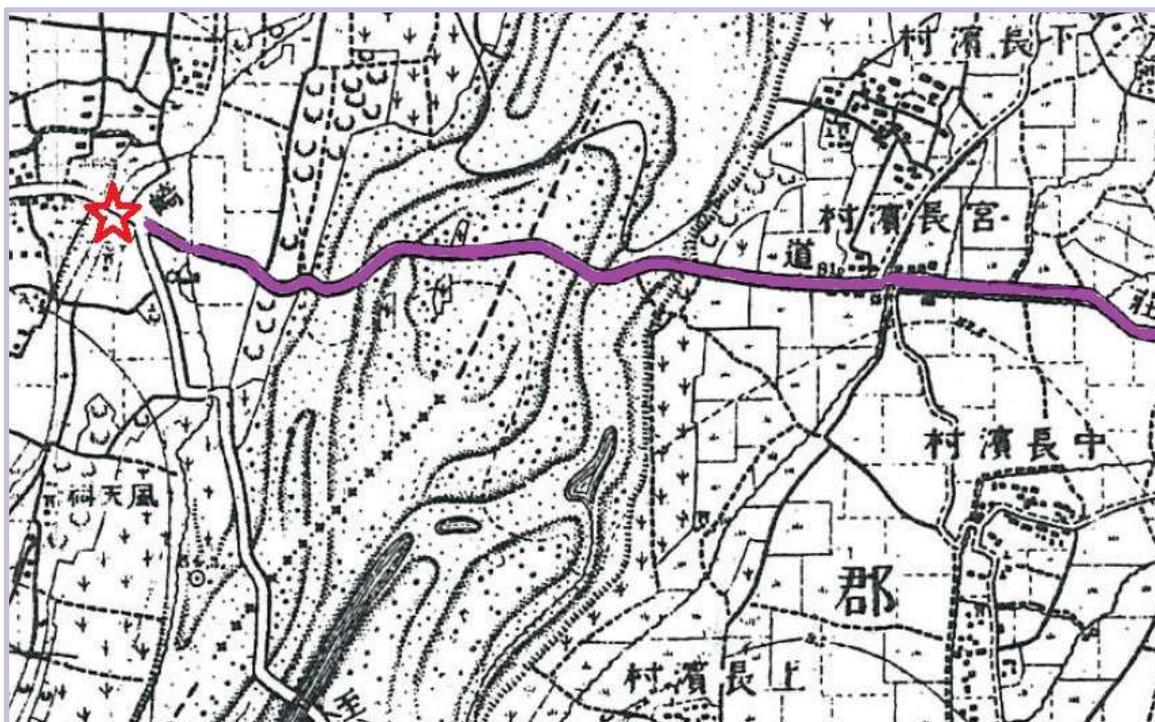
ここで道は大きく左カーブを描くが、昔の藤岡道はまっすぐに神流川に向かっていった。

現在の地図

☆印は、鎌倉街道との合流点



明治 18 年の地図



長浜の渡船場

堤防上の道を右に折れると、河川敷に水天宮の石碑が見える。その先を横切っていたのが昔の藤岡道で、そこには、渡船場があった。



ここの渡船は、川の両側に大きな杭を立て、綱をはり、それを手繰って船を渡す「綱繰り船」といわれるものだった。

歩行渡船と馬渡船がそれぞれ1艘ずつあり、運賃は一人につき5文、馬は一頭につき10文だった。



上野国に入った藤岡道は、小林村（藤岡市小林）で神川方面から北行してきた鎌倉街道と合流し、上州路を西に向かっていった。

なお、現在の埼玉県と群馬県を結ぶ藤武橋は、昭和9年の陸軍大演習の時に木橋がかけられ、昭和32年に今の姿に改修されている。



主要参考文献

- 上里町発行『上里町史』
- 広報かみさと
- 上里町歴史観光案内人ガイドブックー中世の道ー

本書を執筆するに当たり、戸矢隆光さん、丸山修さん、田沼孝夫さんの御協力をいただきました。



中山道と藤岡道

再発見シリーズ第2弾

中山道の脇往還 藤岡道の再発見 本庄・金鑽神社～上里町・藤武橋

- 製作 藤岡道街並み調査班
- 取材・執筆 石川 勉 新里 清恵
- 挿絵 風間由香梨

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

〒367-0026

埼玉県本庄市朝日町 1-4-6

TEL 0495-24-1110

2017年7月発行

※本書で使用している地図（3頁、20頁、34頁、37頁）は、国土地理院発行の電子地形図（タイル）を複製したものです。



「ドームの家」



埼玉県マスコット「コバトン」&「さいたまっち」